伝統の復活を！熱烈ファンから励ましの声

「箱根駅伝を強くする会」恒例の懇親会開く

「頑張れ！」「来年は優勝を目指せよ！」―。「中央大学箱根駅伝を強くする会」が主催する恒例の平成21年度選手激励会・会員懇親会が4月15日、上野精養軒で盛大に開かれた。

この日は強くする会会員の熱烈な中大駅伝ファンはじめ大学関係者ら143人が出席。OBらの叱咤・激励の声に対し、駅伝部の新入部員らは、「箱根で活躍したい」などと健闘を誓った。

あいさつする「強くする会」の上岡副会長

中央大学の校歌と割れるような拍手のなか、緊張した面持ちの1年生を含めた駅伝部員が入場すると、会場内は一気に賑やかな雰囲気に包まれた。はじめに「強くする会」の上岡君義副会長が、「新入部員は先輩に追いつけ追い越せと精進してもらいたい」とあいさつ。続いて、久野修慈理事長が、「陸上部を強化するために専用の寮を新設することにした。新しい設備のなかで安心して練習、学問に励んで欲しい」と述べ、日野市豊田に専用の寮を建設することを紹介し、選手たちを激励した。

浦田監督

次いで永井和之総長・学長、井上彰陸上競技部部長（法学部長）が、それぞれあいさつに立ち、「中央大学の伝統を復活させて欲しい」などと選手らを激励したのに対し、浦田春生陸上競技部駅伝監督が答礼のあいさつ。

浦田監督は、「昨年度はなんとかシード権確保はできたものの、みなさんに報告できるような成績ではなかった」とことし正月の箱根駅伝を振り返り、「今年度は昨年度以上に危機感を持たねばならない。新入生も入ってますます切磋琢磨して欲しい」と選手の奮起を促した。また「昨年はケガや体調を崩す選手が多かった。予防に専念し、しっかりした体づくりからはじめて、全員が力をつけて安心して試合に臨めるようにしたい」と述べ、箱根駅伝に向けて確固たる信念を持ってのぞむ姿勢を示した。

このあと、選手を代表して高橋靖主将が、「今年は強い中大復活のためのチームの基盤作りを目標に掲

一人一人紹介される新入生部員

げている」とし、「環境面でこれだけサポートしてもらっているので、自分たちが変わるしかない。監督も2年目で考えも浸透してきたのでチームが大きく変われる」と捲土重来を期することを誓った。

井上洋平主務が4年生から順々に選手を紹介し、新入生の番になると、会場内からは「頑張れよ!」と声援が飛んだ。

新入生は一言ずつインタビューに答え、「伝統校である中大に入学できたので、箱根を目指し、1年生から上級生に負けないようしっかり走りたい」(新庄浩太選手)、「一年目から箱根駅伝に出てチームに貢献したい」(野脇勇志選手)、「長い距離に慣れるため、先輩たちについていきたい」(渥美昂大選手)、「甘いことを考えずに、いつか箱根に出られるように頑張る」(鈴木大和選手)、「ケガなく過ごし、箱根を走りたい」(佐々木健太選手)、「チームが勢いづくような走りができる選手になりたい」(服部峰祥選手)、「ケガなく体力をつけて、箱根で大活躍したい」(大須田優二選手)、「自分はいつか中大を応援してくれる方々の期待に応えられるよう頑張りたい」(塩谷潤一選手)―などとそれぞれの目標を語った。

このあと、「強くする会」の志郵守夫幹事の乾杯の発声で、懇親会に移り、会場のあちこちで選手らを囲んで、歓談の輪が広がった。

最後に応援団リーダー部とチアリーディング部が校歌、応援歌を披露し、激励会・懇親会を締めくくった。

「中央大学箱根駅伝を強くする会」は1988年に創立され、毎年正月には箱根に1泊して駅伝の往復路を応援、年3回の合宿にも応援参加するなど、〝物心両面〟にわたって駅伝を支援している。

(学生記者　駒田恵=法学部4年/稲瀬正樹=法学部3年)

応援団が激励会に華を添えた

インターン経験を今後の大学生活に生かす

35人が参加して体験報告会開く

春休みにキャリアデザインインターンシップに参加した学生を対象に、「インターンシップ体験報告会」が4月18日、キャリアセンターの主催で多摩キャンパス内で行われた。

インターンシップ体験報告会の目的は、インターンでの経験をグループディスカッションにより他の学生と分かち合い、今後の学生生活や就職活動への目標確認などに役立てることにある。

この日は、35人が参加。キャリアセンターの担当者が、「インターンシップの体験を言語化し、他のインターンシップ生に伝える。次に、インターンシップの効果を顕在化し、最後にインターンシップの意味を深化させることを目指してください」と挨拶し、報告会ははじまった。

まず行政機関へインターンシップした学生と、民間企業へインターンシップした学生に分かれ、その中から1班6人のグループをつくり、インターンシップの目標は何か、その目標は達成できたか、などについてディスカッションを行った。

行政機関の農林水産省、八王子市役所をはじめ、民間企業の京王電鉄、セブン-イレブン・ジャパンなど

違う職種にインターンシップしている学生と交流できる機会は、なかなかないので、どの班でも積極的に意見が交わされた。

次に、行政機関にインターンした学生と、民間企業にインターンした学生を混合にして班を組み直して、インターンシップで一番発揮できた能力は何かについて発表しあった。発揮できた能力は、経済産業省が定義している「主体性」「実行力」「発進力」など、社会人に必要とされる「社会人基礎力」の全12項目のなかから選んだ。

キッコーマン株式会社にインターンした佐藤宏美さん（法学部3年）は、「インターンの最終日に、キッコーマンへの提言をプレゼンテーションさせられました」と、一番発揮できた能力に「課題発見力」を挙げた。

また、株式会社セブン-イレブン・ジャパンにインターンした藤井智康さん（商学部3年）は、「自発的に行動していく能力の大切さを感じました」と述べ、一番発揮できた能力に「主体性」を挙げた。

6人のグループに分かれてディスカッション

最後に、「みんなの意識の高さに刺激された」「自分に足りない物や、強みを見つけることができた」など、インターンシップ意見交換会を終えた感想を各班でまとめ、代表者が発表して報告会を締めくくった。

（学生記者　西野美雪＝法学部3年）

木村聡さん（総政4年）が文部科学大臣賞

全国学生俳句大会で念願の最優秀賞を受賞

今年1月に行われた第39回全国学生俳句大会（主催・日本学生俳句協会）で、総合政策学部4年の木村聡さんが、大学部門の最優秀賞と文部科学大臣賞を受賞した。

全国学生俳句大会は、全国の小・中・高・大学生を対象にした国内最大規模の俳句大会で、小・中・高・大学生の各部門ごとに最優秀賞が1句選ばれ、その中から大会の最高賞の文部科学大臣賞が選出される。今年は、全体で約21万句の応募作品があり、このうち大学生部門には約490句の応募作品があった。

木村聡さん

木村さんが受賞した作品は、『コンパスの針が紙刺す原爆忌』という夏の俳句だ。これは、高校の数学の勉強でコンパスを不器用に扱ってしまったため、紙に穴をあけながら円を描いたという思い出と、広島・長崎の原爆の被害が円を描いて広がる夏の情景を同時に表現した作品だ。

審査員からは、「若い世代の危機感の表明」「人生へ真正面から立ち向かっている」と、木村さんのまっすぐな姿勢が評価された。木村さんは受賞した時の感想について、「嬉しさもあったが、現在はその気持ちは薄い。過去の栄光にしばられないようにもっといいものを作り続けていきたい」

と力強く語ってくれた。

木村さんが俳句と初めて出会ったのは、小学4年生の国語の授業だった。本格的に俳句を始めたのは高校に入ってからで、3年間文芸部で勉強。高校を卒業し、中央大学に入学すると、「残念ながら俳句を作る目的の団体がなかった」ため、いまも独学で俳句の勉強をしているという。

全国学生俳句大会には、高校2年からほぼ毎年投稿し、今回の投稿で4回目。これまでに2回、部門の2位にあたる特選に選ばれ、今年は念願の最優秀賞を受賞した。

俳句に情熱を傾け続けてきている木村さんは、「俳句は古いというイメージがあるが、実はそうではない。俳句からは新しい感動を得ることができる。先入観を捨てて俳句を見直し、自分の世界を広げてほしい」と、もっと中大生も俳句になじんで欲しいとの想いを語ってくれた。

（学生記者　山岸怜奈＝総合政策学部3年）

「ノンハラスメントマーク認定制度」がスタート

防止意識が高い団体に認定書とマークを発行

中央大学からハラスメントをなくそう―と、ハラスメント防止に意識が高く、防止啓発に努めているゼミやサークルなどの団体に「ノンハラスメントマーク」を認定する制度（ハラスメント防止啓発委員会主催）が、このほどスタートした。

いじめやつきまとい、それにデートDV（ドメスティックバイオレンス）などのハラスメントで悩む人たちは最近、若者の間でも増えている、といわれる。中央大学のハラスメント相談窓口（ハラスメント防止啓発支援室）に寄せられた相談件数は58件（2008年度）だが、それをはるかに上回る人たちがハラスメントに悩んでいるとみられている。

スタートした認定制度は、「ハラスメントのない学生生活をおくる」ことを目的にした全国の大学でも先駆けとなる人権啓発活動で、発案したのは、学内のハラスメント防止啓発に取り組んでいる学生団体NHP（NON HARASSMENT PROJECT）。

NHPは、有志の学生たちによって2008年はじめに結成され、ハラスメント防止を呼び掛けるハラスメント防止啓発委員会が主催するキャンペーンに企画段階から参加するなど、さまざまな活動を行ってきている。そんななか、メンバーの笹原崇寛さん（商学部3年）が思いついたのが、「ノンハラスメントマーク認定制度」だ。

笹原さんは、アイデアを支援室に持ち込み、支援室と共に認定方法などを企業に取材。制度実現につながった。

笹原さんは、「この制度で学内からハラスメントをなくそうというムーブメントが高まると嬉しい」と期待を寄せている。

認定制度の対象となるのは、「一人一人の尊厳や人格をお互いに尊重し、ハラスメントのない学生生活を送りたい」と考えているサークルやゼミなどの学生団体で、認定を受けるには、

大谷浩二さん（左）と笹原崇寛さん（右）

団体として、専門のカウンセラーによる研修を受けたのち、ハラスメント防止啓発委員会が資格審査する。

委員会で団体のハラスメント防止への姿勢などが評価されると、団体に対し、認定書と認定番号入りのマークが発行されることになる。

ノンハラマーク

マークは、リボンで結んだ赤、青、緑の3色の風船をデザインしたもので、赤は「温かさ」、青は「冷静さ」、緑は「穏やかさ」を表現し、この気持ちがどこかに飛んでいかないように、心をひとつにしようという思いが込められている。

NHP代表の大谷浩二さん（総合政策学部5年）は、「研修を受けることによって、団体内でハラスメントに関するトラブルが起きたとき、より良い対応ができるようになります」と強調。また、認定マークを持つことによって、「ハラスメント防止に対する意識が高い団体であることを内外に示すことにもなります」と呼びかけている。

「ノンハラスメントマーク認定制度」についての問い合わせ、申込および学内のハラスメントに関する相談は、ハラスメント防止啓発支援室まで。

TEL 042-674-3507
E-mail harass-soudan@tamajs.chuo-u.ac.jp

（学生記者　廣瀬功一＝文学部2年）

AEDを使った心肺蘇生の講習会開く

後楽園に2ヵ所、多摩に6ヵ所設置

「AED」というのはご存じでしょうか。「自動体外式除細動器」というもので、心室細動といわれる血液を流すポンプ機能を失った状態の心臓に、電気ショックを与えて、正常を取り戻すための医療機器だ。

いざ、という時に、この機器の扱い方法を知っていれば、救急の傷病者を救うことができる。というわけで「AEDの利用講習会」（学生課主催）が5月14日、多摩キャンパスで開かれた。

この日は、3日間の講習を受けて応急手当普及員認定証（東京消防庁発行）を取得した学生課職員が講師になって、AEDの使い方について人形や訓練用AEDを使って実技中心に講習が行われた。

AEDを用いた心肺蘇生の手順は、次のようになる。まず、倒れている人を見つけたら、周囲の安全を確認し、呼びかけに反応があるかどうかを確かめる。反応がない場合は、周囲の人に大声で助けを求め、「119番通報」と「AED準備を依頼」したうえで、気道を確保して普通通りの息があるかどうかを確認する。息がないと人工呼吸（2回）をして、心臓マッサージ（30回）の心肺蘇生を繰り返す。

そうした段階を経て、到着したAEDを使うことになる。使い方は、非常に簡単だ。AEDは製造メーカーによって種類の違いはあるが、本学に備え付けの

人形を使って心肺蘇生の講習

AEDは、蓋をあけると自動的に電源が入るタイプなので、流れる音声の指示に従えばよい。

①音声に従い、電極パッドを患者の素肌2ヵ所にしっかり密着させるように貼り付ける。貼り付ける場所は、本体の電極パッドに図で示されているので、その通りに張り付ければよい。

②機械が自動で心電図を解析し、必要な処置を始める。このときは、傷病者から離れる。傷病者の体に触れていると、解析に影響を及ぼすことがあるからだ。

③音声の指示に従って点滅ボタンを押す。すると電気ショックが開始される。

こうした扱いを知っていれば、咄嗟のときに役立つことになる。最近では、一般市民がAEDを使って救命したという実例が増えているという。

第2体育館入口のAED

「備えあれば憂いなし」で、緊急事態に備えて、普段からしっかり確認しておくことが必要だ。AEDは後楽園キャンパスには2ヵ所、多摩キャンパスには6ヵ所設置されている。

後楽園キャンパスは、1号館1階の保健センターの入口前▽5号館4階アリーナ入口の2ヵ所。多摩キャンパスは、Cスクエア2階の中ホールの入口前▽2号館2階の保健センター入口前▽6号館1階の法学部事務室入口▽第1体育館2階のホール内▽第2体育館1階事務室の入口前▽中央図書館2階の計6か所だ。

近くを通った時にでも、自分で確認するようにするとよいだろう。

なお、講習会は今年度から月1回のペースで開かれる。

（学生記者　今子佳奈＝文学部3年）

学生記者になりませんか

「Hakumon ちゅうおう」は中大生が取材・編集する大学広報誌です。
現在、多摩と後楽園キャンパスそれぞれで1、2年生の学生記者を募集しています。

- 元新聞社論説委員のプロや先輩の学生記者に取材方法・原稿の書き方はじめ添削指導を基礎から受けることができます。将来どんなキャリアをめざすにも文章力が重要です！
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

申し込み
問い合わせは

中央大学広報室『Hakumonちゅうおう』
編集担当：伊藤博まで
Phone：042−674−2048（直通）
E-mail：hiroito@tamajs.chuo-u.ac.jp